宮崎汎会員が見た世界第１部映画編・第１１話

ペトラは映画「インディ・ジョーンズ最後の聖戦」の舞台　ヨルダン

映画「インディ・ジョーンズ最後の聖戦」は、アメリカのパラマウント映画配給の大ヒット作である。監督はスティーヴン・スピルバーク、俳優はハリソン・フォードと００７の主演を務めたショーン・コネリーといった豪華な顔ぶれで、親子が聖杯を求める冒険物語である。映画では短いシーンであったがペトラ遺跡が映し出され、瞬間これは凄いと身を乗り出した。そして一体これはＣＧなのか実在するものなのかと疑った。　注）ペトラ＝ギリシャ語で断崖
ペトラ遺跡を知ったのはこの映画であったが、いつかチャンス見つけて自分の目で確かめてみたいと思った。

回廊への入口

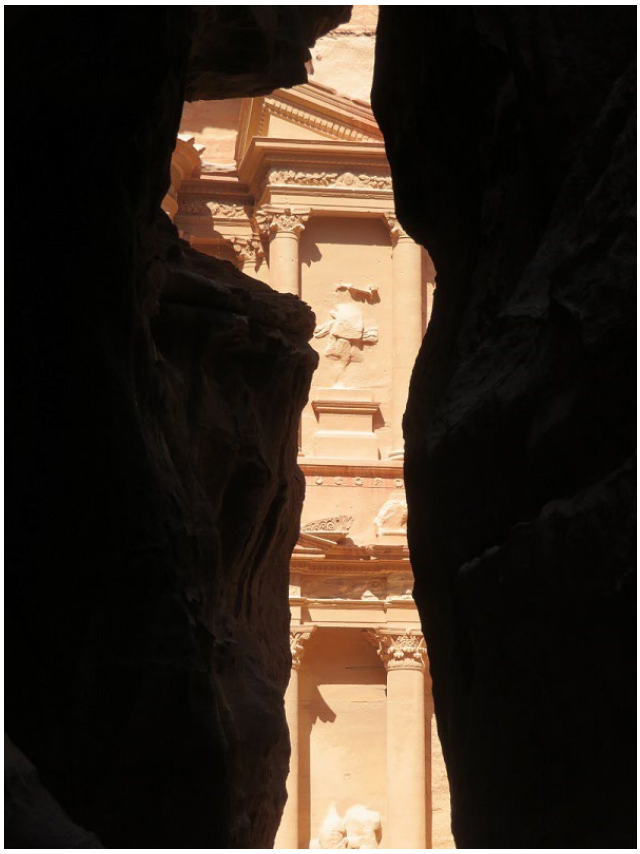
ツアーに参加した。これまでペトラは雑誌・ＴＶ・書物や写真でいつも目にし、特にハイライトである「エルハズネ」にいよいよ対面が叶うと思うと胸がときめいた。
以下は訪れた当日の旅日記からの引用である
「入り口を入る砂とゴロタ石の歩きにくい砂原を行く、モロッコの砂漠のようなパウダー状の細かな砂が歩くたびに舞い上がり、靴はすでに砂まみれ黒い靴が真っ白である。最初に目に留まったのは左側の崖に刻まれたオベリスクのようなものである。これは“オベリスクの墓”と呼ばれている。ペトラは入り口を入るとエルハズネ（アラビア語で宝物館）に行く細い回廊（シーク）がすぐに始まると思い込んでいたが・・・・シークに至るまで炎天下を随分歩かねばならない。入り口から３０分ほど歩いてようやくシークの入り口にたどり着いた。

狭い回廊は続く

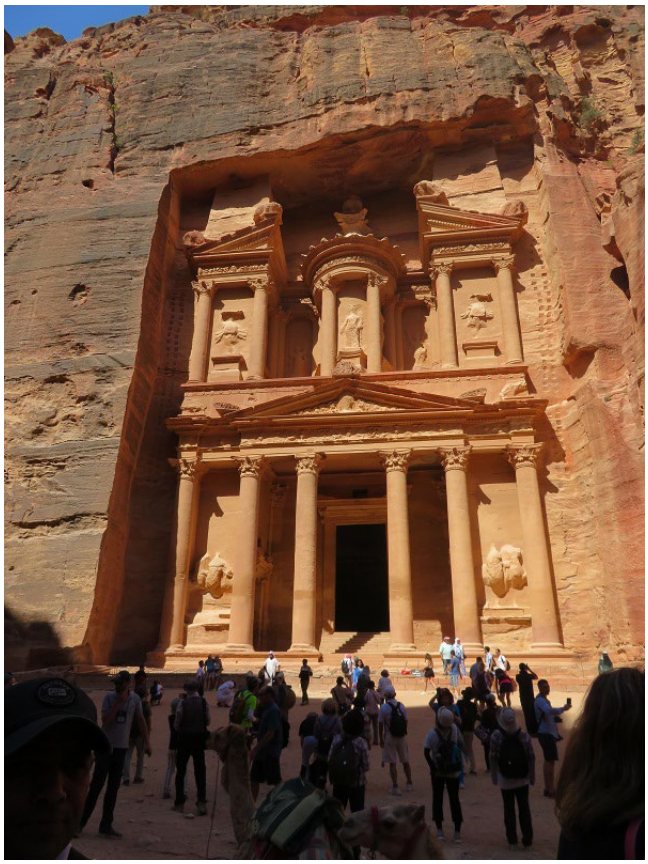
シークに入るや両側から高い断崖が迫り、見上げると真っ青な空が切れ切れに見える。幅は予想していた以上に狭く３，４ｍ、広いところは馬車２台がならんで通れそうだが、狭いところは一台が通れる幅しかない。断崖が高く地の底を這うように歩くので陽もここまでは差し込まず常に日陰となり空気が乾いていて涼しい。時々観光客を乗せたロバや４人乗りの馬車、時にはラクダとすれ違うが避けるに怖い思いをする。
回廊にはダムのような堰堤があったり、岩に刻んだラクダの足や人間の腰から下が残っていたりする。当時はいろんなものがあったのだろうが長年月が砂岩を風化させてしまい、今はほとんど残っていない。目の高さあるいはもっと高いところに水路に使った導水路がはっきり痕跡を残している。
ところどころローマのアッピア街道で見るような石畳が残っている。かつてはこのシーク内全てが

石畳で覆われていたのであろうか。
唐突にシークの隙間から夢にまでみたエルハズネが半分姿を見せた。まことに劇的な出会いだ。
目の前のエルハズネは日に照らされピンク色に染まって神々しく輝いている。だが不思議なことにこみ上げるような感動が湧いてこない。

シークの中を行く、狭い所は 3，4mか。上を見ると岩壁の割れ目から青い空がのぞく



唐突にエルハズネの前に出る



岸壁に刻まれたバラ色に輝くエルハズネ

きっとこれまでＴＶや写真で何度も見慣れた光景だからに違いない。それでも夢中でシャッターを切った。さらにエルハズネの右側を回り込んでいくと谷間が広く開けて道が続く。
付近にはラクダやロバの待機場でもあるのか、甲高い動物のいななきが聞こえる。右側の高みには遺跡が沢山連なっている。これは王家の墓だ。広場の左には小さな土産屋とボトルに砂を詰めて絵柄を書く“サンドボトル屋”があり、ここへ連れ込まれ実演を見る。色違いの砂を瓶に入れて細い針

金のような物を動かすとラクダが浮かびあがった器用なものである。
名前まで入れてくれる。15 ドルから 20 ﾄﾞﾙで、何人かが注文した。帰りに受けとるようだ。
この店に 30 分もいた。買う気もない人は炎天下でぼーっと待っていなければならない。
観客 3 千人を収容した古代のローマ劇場を左手に見る。やがて右手に大きなピスタチオの古木がたった一本あり、そこにあるごく小さな橋（水は枯れて川底は乾いている）を渡り丘の高みへと登る。足場は悪く炎天下の急坂はきつくつらい。上り詰めると近年発掘された神殿跡だろうか？モザイクの床などを見る。ここから左手斜面の下を見ると柱廊のある遺跡や神殿なのか多くの遺跡がならんでいる。斜面を下ると大きなレストランがあってここで昼食をとる。シークを通りここまでの間、コバエがしつこくまとわりつき大変不快。多分ロバの糞などがあちこちにあるためだろうか、レストラン内にも沢山いて手で払いながらの食事となる。
13 時添乗員の引率で険しい山の頂にあるエド・ディルを目指し希望者のみ山登りを開始する。
最初から歩きにくい山道でしかも急坂だ。時々ロバに乗って登る観光客もいる。右は崖になっていて怖い。ロバも急坂を喘ぎながら登る。道が狭いのでロバが近づくと避けるに苦労する。アラブ人の子供が観光客を乗せて下から上がってきた。避けているのにロバが足を滑らせ足を踏んだ。ロバと崖の間に挟まれ一瞬恐怖を感じる。引率していた馬方の子供が詫びたがロバはぐんぐん登って行った。岩のトンネルをくぐる。あとはひたすら坂道を黙々と歩く、喉も乾き水を飲みながら歩きにくい道を上へ上へとたどる。
約 40 分ようやく小さな茶店までたどり着いた。冷たい水を補給して一休みする。アラブ人の親父がここは行程の半分だよとニヤリとする。ここからの登りはまたきつく喘ぐ。20 分ほど頑張って歩むがもうくたくたに疲れたし、かつて登山で鍛えた足も頼りなく弱り、残念だが途中から引き返すことにする。
レストランのある平坦な道までようやくたどり着きほっと一息つく。レストランの庭に張ってあるテントの日陰で 20 分ほど水を飲みながら休憩をとり気力を取り戻す。

神殿の跡であろうか

先ほど高みから眺めた柱廊や神殿の中を通り抜ける。炎天下でつらい。陽を遮るものは何もなく、帽子は嫌いで何もかぶっておらず、じりじりと陽にあぶられ桃色吐息ならぬ青色吐息。ホテルまでまだまだの距離気ばかり焦る。
広い河原のような道を遮る木陰もなくひたすら歩く、ラクダ引きやロバを連れた御者から乗らないかと勧められ煩わしい。ひたすら自分の足で歩く。
喘ぎながら土産物屋のあるところまでたどり着いた。角を右に曲がる。やっとエルハズネまで戻った。ここは相変わらずの人波である。一体世界中から観光客がどの位やってくるのか？周りで飛び交う言語も様々だ。
シークに入る。ここは朝と同じように陽が差さず涼しくほっとする。時折馬車が速度を上げて駆け

抜けるので気を付けたい。暑さと疲れで出口まではこんなに長い道のりであったかと思うほど遠く感じられる。3度ほども小休止、ぬるくなった水を口に含む。息切れがする。空気が乾いて汗はあまりかかないが、むき出しの肌を刺す日差しは痛いほどだ。やっとシークを抜けた。シークを抜けるとすぐゲートと思い込んでいたが、ここからまだ入り口まで随分とある。疲労困ぱいでたまらず2度腰を下ろして休んだ。ようやくゲートまでたどり着いた。ここからホテルまで６００ｍもう一息だ。」（以上旅日記）

ペトラ遺跡はバラ色の砂岩で造られたナバテア人の古代都市遺跡群である。ナバテア王国はペトラを首都に、紀元前2世紀ごろ栄えた。ナバテア人は北アラビアを起源とする遊牧民族で紀元前１６８年に建国された国である。ペトラには先住民のエドム人がいたがナバテア人が入り込みここを中心に定住地とした。
岩盤の狭い峡谷（シーク）が終り三方を断崖に囲まれた広場には高さ４３ｍ、幅３０ｍのエルハズネがそびえている。1世紀初頭ナバテア王の墳墓として造られたと伝えられている。ここペトラは岩礁地帯で農業にはまったく不向きであるが、ペトラはアラビア半島とエジプトやシリアなど中東の人や物が行きかう交通のかなめともいうべきところである。ナバテア人は交易の十字路である地の利を生かし、隊商の安全を保障し、関税をとりさらに交易によって莫大な富を得ていた。
地震に襲われたり、時代と共に通商路が変わってしまい交易ルートから外れるなどして、次第に国力が衰え７４９年ナバテア人はペトラを放棄せざるを得ず、時の流れとともに人々の記憶から忘れ去られ、１８１２年スイス人の冒険家ヨハン・ブハルトに発見されるまで、千年間も世に知られることはなかった。　（２０１７年）